

現代標記・注記・解題付

# 『明治農書全集』

全 13 巻 (1983~86 年刊)

発刊に当って・巻構成・収録農書一覧

<目 次>

- ・『明治農書全集』発刊に当って（古島敏雄）・・・・・・・・・・ 1
- ・巻構成・収録内容の解説・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- ・『明治農書全集』完結にあたって（農文協）・・・・・・・・・・ 6

## 『明治農書全集』 発刊に当って

監修委員代表 古島 敏雄

広く国民各層の支持をえた「日本農書全集」に続いて、「明治農書全集」を発行するに当って、監修者としての方針を述べておきたい。

一

今回の企画で、前回と違う一番大きな点は、「日本農書全集」が農民の農業経験を反映した、いわば「百姓の農書」を重視したのに対して、今回は近代科学としての農学知識を盛った著作をも加えた点である。しかし採用したものは、研究書ではなく、農民を対象とし、実地に応用されることを期待して書かれたものである。それらの多くのは広く農民に読まれ、明治後期から昭和前期にかけてのわが国農業技術の基礎づくりに役立ってきた。

今日の農業の姿は、戦後昭和三十年頃からその姿をあらわしてくるが、その大きな特徴は、土作りを忘れ、動植物の自然の在り方を無視して、化学肥料や農薬の力に頼った栽培を続けていることであろう。土が固まれば、トラクターの馬力を大きくすることだけを考慮して、借金をふやし、生産費を高くしている。作物の本来の味が失われるだけでなく、農薬公害なども生み出している。

大正期から昭和前期にかけて、化学肥料の使用量は増大はしているが、それは伝統的な堆肥と合せ用いられて、土作りの役を果たしている。そのためには数は少くとも牛・馬・豚などの家畜を飼い、牛馬の力も用いられ、草刈場もあり、雑木山も豊富な、日本の伝統的な自然の姿を広く残していた。今日各界で問題にされる自然保護の必要性は、今日の農業の姿が、以前と変わったことから生じたのだといってもよい。

明治期の農業は、大正・昭和期の農業から化学肥料の使用を除いた姿を示しており、江戸時代に発展を見せた所に、新しい農学の知識を加えて完成されたものである。農業は生物の自然の生長の力に、人力の援護を加える形をとっていたのである。今日の農業の反省はこの時点との比較の上に果されるものといえることができる。このような時代を映す鏡が、ここに十三巻にまとめられた諸業績である。

二

明治期経済の発展面は、ふつう、「上からの資本主義化」という言葉であらわされる。しかしその陰にある農村・農業にも発展はあった。その証拠の一つは人口現象にみられる。江戸時代を通じて停滞的であった人口が、明治に入って着実に増加していることである。明治5年(1872)に戸籍法が施行された時から40年後の1912年までに、本籍人口は約45パーセントふえている。これは農村でふえた人口が都市で生計の途がえられる商工業の発展の影響でもあるが、働きに出る年齢になるまで、貧しくても農村で生き続けうようになった事が根底にある。この都市への人口流入は都市人口をもふやした。明治5年頃、人口1万以上の町居住人口比率は総人口の10パーセント位であったが、明治41年には23パーセントになっている。そのような町(市を含む)の数は99か所から246か所にふえている。農村で副業として営まれる織物業などにも、生産形態の発展はみられる。

農業の変化をみると、江戸時代に最も高い技術水準を示した綿作・菜種作・藍作などは、外国からの輸入品や化学工業製品に圧倒されて衰退したが、米作・養蚕は着実に発展した。米の推定実収量統計を見ると、明治16年から20年の平均収量を基準にすると、25年後の41年~45年平均では、ほぼ50パーセントをましている。人口増加率をやや上回る比率である。養蚕業の発展は同じ時期に上繭(じょうけん)収量をほぼ四倍にしている。稲作の発展には魚肥・油粕類の肥料施用量の増加、優良稲品種の選出・普及、乾田化の進行、牛馬耕の普及などが関係し、養蚕の発展には飼育法の発展、桑栽培面積の増加、桑や蚕の品種改良などが関係している。これらの進歩発展には老農・篤農などと呼ばれる農民の努力、新しい教育を受けた研究者の努力の結果と、その知識の普及が与っている。これらの努力のうち、著書・論文・講話などの、印刷物として発表されたものの主要なものを選んで復刻するのが本全集の内容である。

三

本全集に採録した点数・人数では、老農・篤農と呼ぶべき人々(第一グループ)のものが最も多いが、その他に、近代科学としての農学の研究者・教育者(第二グループ)や、個人的に外国農業を学んで、新しい農業部門

(果樹栽培や酪農)の大経営を試みた人たち(第三グループ)の著述や記録をも含んでいる。

老農・篤農と呼ぶべき人々の代表は林遠里・中村直三・奈良専二・船津伝次平・石川理紀之助・赤沢仁兵衛・小柳津勝五郎・中井太郎・梅原寛重・益田素平などである。これらの人々のなかには、国・県の農業巡回教師となって、各地を講演して回った人もある。また国や県の試験場・学校に職を奉じて、近代的な農学教育を受けた人々や学生に、在来の農耕法を教えた人々もある。しかしその人たちの素養は自分の農耕経験を下地として、在来農書の勉強をし、新しい工夫を加えたものである。中村直三や石川理紀之助のように、自分の圃場での観察をもとに、稲の多くの品種の特性を確かめる仕事をやった人もある。これは江戸時代の「百姓の農書」にみられた発展面を素直に伸したものであるということもできる。しかし新しい農学を代表する人たちから、その著述の内容を批判されると、特殊な条件の下での農耕経験を深めることによって対抗するのではなく、儒教の經典中の言葉などの独特な解釈や引用によって自説を固めようとするような、江戸時代の「学者の農書」著者のなかにもみられる態度を示すものもある。

近代農学の教育は駒場・札幌の両農学校でまず行われ、その卒業生や卒業後外国留学を終えた人々が、外人教師とともに研究を行うようになる。明治二十六年農事試験場創設以後、これも農業技術研究の拠点となる。今日までにいたる農学研究の歴史を見る時、明治期の研究には、一つの大きな特色がある。それは研究対象を当時の日本農業におき、当時の農民たちが関心をよせる問題を取上げていることである。駒場農学校の後身東京帝国大学農科大学におけるケルネルの研究は、在来肥料の成分分析や日本の主要農産物種実の成分分析に重点をおき、農事試験場では肥料の三要素の配合による収量試験を、開設初期から試みている。それらの結果が、酒匂常明等の農学者の著書に反映し、府県試験場の技師たちの講話に反映している。農事試験場の研究課題の中心の一つにはやがて稲の品種改良が加わっていくが、その前提には、農民の手で選び出されて、多様な地方的品種名で呼ばれる優良種を集め、整理する仕事がある。やがて純系分離・交配育種などが行われていく。養蚕業の発展のかけには、蚕による遺伝研究が行われ、続いて交配種の出現をみるようになる。

第三グループの外国農業の知識を身につけた上、在野の人として農事普及や農場経営に従事した例は初期の津田仙のほか、新潟県で葡萄栽培・葡萄酒醸造を営んだ川上善兵衛や、群馬の神津牧場の基礎を築いた神津邦太郎をあげることができる。

本全集では稲作中心の著書のほか、農林業の全般にわたる著書を選び、それぞれの主たる関心に従い、稲作・普通畑作・特用作物・蔬菜・果樹・畜産・養蚕その他・土壌肥料・農具・土地改良・病虫害その他・林業林産別に十三巻に編集し、各分野の専門家の指導の下に難解字句の注釈と、農業技術発達史の見地からの解説を加えて世に送るものである。

＜監修委員＞

古島 敏雄(東京大学名誉教授)

川田信一郎(東京大学名誉教授)

熊沢喜久雄(東京大学農学部教授)

須々田黎吉(東京農業大学農学部教授)

(所属は発刊当時の所属)

## 【巻構成・収録内容の解説】

### 第1巻 稲作 重要作物塩水撰種法・他

横井時敬 他著 須々田黎吉 編

福岡の老農林遠里の「寒水浸、土圃法」は、馬耕教師を通じて全国に広まり一世を風靡した。この農法に敢然と反撃したのは駒場農学校卒の近代農学者・酒匂常明である。これはのち横井時敬や奈良専二、船津伝次平らをまきこんだ稲作論争に発展する。老農と近代農学者が明治農法を築いていく過程を俯瞰できる一巻。

<収録>

林 遠里 勸農新書（明治14年）

横井時敬 重要作物 塩水撰種法（明治28年）

酒匂常明 米作新論（増訂三版、明治25年）

酒匂常明 北海道米作論（増訂五版『米作新論』より明治29年）

解題・注釈 須々田黎吉

### 第2巻 稲作・一般 新撰米作改良法・他

石川理紀之助 他著 須々田黎吉 編

明治三老農の一人として活躍した奈良専二は、早くから稲の品種改良につとめ一本稲をそだてあげた。各地の老農や近代農学を身につけた人たちが、それぞれの地域で、あるいは全国的に活躍を始める時代である。稲を中心に農事全般について論述した老農と学者の著者御殿を収録。

<収録>

奈良専二 新選 米作改良法（明治21年）

船津伝次平 船津甲部巡回教師演述筆記（明治21年）

志岐守秋 山形県稲作改良法筆記（明治24年）

飯田弥次兵衛 農事講話筆記（明治5年）

石川理紀之助 稲種得失弁（明治34年）

解題・注釈 須々田黎吉

### 第3巻 稲作 米作法講話法・他

鈴木良平 他著 須々田黎吉 編

鈴木は静岡で、池川は愛媛で、末吉は山口で、古市は愛知で活躍した老農たち。彼らは自らの体験を基礎にしつつも、積極的に科学をとり入れ、実験を開始す

る。明治の後半には米穀改良に対する声も高まった。中村の論文は熊本日日新聞社が募集した「米穀改良に関する意見」の一等賞受賞論文。

<収録>

鈴木良平 米作法講話録（明治26年）

池川次太郎 農業実験録（明治28年）

末吉幸次郎 興農新書（明治29年）

古市与一郎 与一流稲作法（明治32年）

中村貞介 米穀に関する意見（明治37年）

解題・注釈 須々田黎吉

### 第4巻 畑作 麦作革新論・他

赤沢仁兵衛 他著 山田龍雄 編

勝手作が公認された明治期には、畑作の改良でも農民の工夫が広がった。外国からの新作物、新品種の導入にとどまらず、自ら実験し栽培にかけた農民のエネルギーの開花である。本巻では麦、大豆、馬鈴薯、甘藷等の基幹作物と畑作改良を論じた六点を収録する。

<収録>

斎藤 司 麦作改良新書（明治22年）

杉田文三 麦菽改良栽培法（明治32年）

峰幾太郎 麦作講義録（明治40年）

小林寿郎 馬鈴薯（明治25年）

赤沢仁兵衛 赤沢仁兵衛実験 甘藷栽培法（明治45年）

前田勝四郎 畑作革進論（明治35年）

解題・注釈 須々田黎吉

### 第5巻 特用作物 茶業須要・他

酒井甚四郎 他著 岡光夫 編

安政の開国によって日本の農業は直接に外国の影響を受ける。茶や養蚕が急成長する一方、藍、綿などは急激な衰退の道をたどった。本巻には10種の特用作物を収録。その技術の発展・確立の足どりを原文と解題から知り得る。たとえば各地の茶産地での整枝せん定法、施肥法、敷草法など、基本技術は明治に確立された。

<収録>

酒井甚四郎 茶業須要（明治18年）

初瀬川健増 漆樹栽培書（正編・明治20年、続編・明治28年）

瀧 正古 三椏栽培録 (明治 22 年)  
田中浜吉 蕓苔改良作法 (明治 22 年)  
飛松忠四郎 楮園改良新書 (明治 23 年)  
遠藤慶三郎 地方棉作要書 (明治 24 年)  
佐藤豊次 煙草栽培法 (明治 30 年)  
矢部量平 蒟蒻耕作手引草 (明治 32 年)  
岡田雄太郎 藺草栽培法 (明治 34 年)  
草野正行 大麻栽培法 (明治 21 年)  
解題・注釈 岡光夫・大石貞夫・佐々木長生

## 第 6 巻 野菜 蔬菜栽培法

福羽逸人 著 松原茂樹 編

新宿御苑技師をつとめ、東京帝国大学園芸学講師であった福羽逸人は、明治 26 年に明治中期の野菜栽培事情と水準を総まとめした。94 種の野菜を扱うが、すでに現在でも新しい野菜と言われるもの（コールラビ、茎ちしゃなど）が登場している。日本人による初の蔬菜園芸学の成立を示す。温床による促成栽培、軟化栽培、貯蔵室の設置などを図示し、野菜作りの基礎をつくった。旧津和野藩主につながる子爵ながら気さくに農民と語り、農家の現場の技術に学んだ。

<収録>

福羽逸人 蔬菜栽培法 (明治 26 年)  
解題・注釈 松原茂樹

## 第 7 巻 果樹 葡萄提要・他

川上善兵衛 他著 松原茂樹 編

明治期に発展の基礎がつくられた三つの果樹、みかん、梨、ぶどうを収録。安部熊之輔は北九州に生まれ、各地のみかんの産地を足で訪ねて本書をまとめる。松戸覚之助は梨「二十世紀」の作出者。川上善兵衛は新潟で自らぶどう園を経営し、醸造まで行ったぶどう栽培の先駆。三者三様の書に果物観・栽培観がある。

<収録>

安部熊之輔 日本の蜜柑 (明治 37 年)  
松戸覚之助 実験応用 梨樹栽培新書 (明治 39 年)  
川上善兵衛 葡萄提要 (明治 41 年)  
解題・注釈 松尾信一

## 第 8 巻 畜産 牛馬蕃殖飼養法要略・他

森田龍之助 他著 松尾信一 編

家畜なき国と評された日本の畜産も明治に入り転機を迎える。役畜、糞畜から用畜へ、農用、駄送用から乳、肉、卵用である。軍用としては馬やめん羊が重視され、農家生活に密着した形で鶏、うさぎ、やぎがいた。農商務省発行の「牛馬蕃殖飼養法要略」は大家畜の飼養管理の指針を示す。

<収録>

農商務省農務局 牛馬蕃殖飼養法要略 (明治 25 年)  
神津邦太郎 物見山神津牧場沿革記 (明治 43 年)  
森田龍之助 増補再版 養豚新説 (明治 34 年)  
原 熙 実用教育農業全書第八編養畜編 (明治 29 年)  
中川一徳 訂正増補 殖鶏秘法 (明治 27 年)  
村上要信 養鷺新説 (明治 39 年)  
解題・注釈 松尾信一

## 第 9 巻 養蚕・養蜂・養魚 養蚕新論・他

田島弥平 他著 吉武成美 編

温暖育、清涼育と各地に並立していた飼育法は、やがて折衷育に収斂していく。それは同時に蚕の品種の変遷と対応していた。本巻では明治初期の「養蚕新論」から末期の「蚕種製造法」まで、養蚕技術の時代を画した四書を収録。近世すでに世界の先端にあった養蚕技術のその後の発展を知り得る。他に養蜂・養魚書を収録。

<収録>

田島弥平 養蚕新論 (明治 5 年)  
藤岡甚三郎 秋蚕 (明治 8 年)  
木村九藏 (中村高樹編) 蚕飼の鑑 (明治 33 年)  
藤沢五三郎 蚕種製造法 (明治 35 年)  
青柳浩次郎 蜜蜂 (明治 3 年)  
黒田伝太 鯉魚繁殖法 (明治 22 年)  
解題・注釈 松村敏他

## 第 10 巻 土壤肥料 実験肥料新書・他

安資農夫 他著 熊沢喜久雄 編

人糞尿・堆厩肥中心だった近世の肥料は、明治に入って急速に多様化した。同時に土に対する化学分析的な研究も進められていく。本巻に収めた四書はその推移の過程と問題のありかを衝く。明治 21 年、日本で最初の化学肥料・過磷酸石灰が製造されて以来、日本

の多肥は世界一となったが問題も多発。その淵源を窺える一巻。

<収録>

小柳津勝五郎 薫焼土調和肥料製造法(明治20年)

恒藤規隆 農事演述筆記(明治21年)

村尾元長 練肥料概要(明治28年)

安資農夫 実験肥料新書(明治37年)

解題・注釈 友田清彦

### 第11巻 農具・耕地整理 兵庫県農具図解・他

中井太一郎 他著 飯沼二郎 須々田黎吉 編

明治農法を特徴づけるものの一つに、「乾田耕」がある。その前提に畦畔の改良があり、灌排水の自由化がある。太一車をはじめとする各種の農具の改良、馬耕や犁もこの基盤の上に導入される。「兵庫県農具図解」は本邦初翻刻である。また「大日本稲作要法」は太一車の発明者によるその解説書。

<収録>

兵庫県 兵庫県農具図解(明治13年)

中井太一郎 大日本稲作要法(後編)(明治31年)

鈴木浦八 畦畔改良意見書(明治33年)

石川県農会 石川県耕地整理事蹟(明治33年)

富田甚平 富田式暗渠排水法(明治39年)

解題・注釈 堀尾尚志・須々田黎吉

### 第12巻 病虫害・雑草・農薬 田圃駆虫実験録(正・続)・他

梅原寛重 他著 小西正泰 編

日本農業は病虫害や雑草との闘いである。本書では民間から官まで病虫害、雑草防除に務めた人々の著12点を収録する。福岡の老農・益田素平はメイチュウの二化と三化の別を知り、その防除法を確立した。除虫菊やボルドー剤は野菜や果樹栽培の安定に大きな役割を果たした官民あげての努力の跡をたどる。

<収録>

梅原寛重 田圃駆虫実験録(正・明治19年、続・明治21年)

村上長造 農家必要 病虫害駆防要覧(明治24年)

小野孫三郎 重要植物 害虫要説(明治24年)

益田素平 稲虫実験録(明治28年)

名和 靖 害虫駆除予防二関スル講話筆記(明治30年)

住田史郎 浮塵子駆除予防法(明治31年)

堀 正太郎 作物病虫害予防法(明治37年)

愛知県立農事試験場 殺菌剤と殺虫剤(明治41年)

御前喜八郎 訂正増補 除虫菊栽培製法全書(明治36年)

阪庭清一郎 雑草(明治40年)

解題・注釈 小西正泰

### 第13巻 林業・林産 吉野林業全書・他

森庄一郎 他著 赤羽武 編

「吉野林業全書」はわが国における最も先進的な育成林業地帯である吉野林業の解説書。育苗から伐出、流送、経営にいたるまで、見事な挿画とともに解説。各地の林業地のバイブルとされた書。「炭焼き」や「椎茸」を含めて、国土の三分の二を占める宝の山を生かす道、今日の山林危機を打開するヒントが多い。

<収録>

森庄一郎 吉野林業全書(明治31年)

田中長嶺 炭焼手引草(明治31年)

榎崎圭三 榎崎式椎茸養成法(明治44年)

解題・注釈 中村克哉・加藤衛拓

## 「明治農書全集」完結にあたって

社団法人 農山漁村文化協会

アジアモンスーン地帯の一角に位置する日本は、高温多雨という気候的特質に支えられて、世界で最も農耕に適した地域となっています。この自然を生かして農耕を続けてきた日本民族は、農耕を土台として独自の社会と独自の文化を築き上げてきました。

幕末、アメリカの提督ペリーとロシアの作家ゴンチャロフらが日本を訪れています。彼らのみた日本農業は灌漑を含む耕地管理のたくみさ、土壌と気候とを配慮した緻密な作物管理、世界のどこよりも高い水準にある耕地からの生産量でした。近世において日本の農耕の水準はきわめて高かったのであります。この農耕文化の上に武家社会と町人社会の日本的形態が築かれ、ロンドンをしのぐ世界の一大都市・江戸の繁栄がありました。

明治の文明開化の中で、「近世農法」に近代科学をとり入れ「明治農法」といわれる農法が形成されました。「明治農法」は、近世農法の担い手である老農といわれる人々と、近代科学を日本の土壌にとり入れるために研鑽した農学研究者との協力によって創造されたのであります。こうした気運の中で果樹や酪農など、新しい農業を実践する人々も生まれ、「明治農法」の一翼を担っていきました。

本全集は「明治農法」を形成、発展させたこれらの人々の著作を集めたものであります。ここにアジアにおいて日本が近代化に成功した土台があります。

「明治農法」は基本的には昭和三十年代のなかばまでつづいてきました。日本農業の姿と人々の暮らし方が激変したのは、遠い日のことではありません。

「農業の近代化」が叫ばれて以来ほぼ三十年、「明治農法」は見る影もなく破壊された。化学肥料と農薬づけの食糧で、母なる大地と人間の生命がおびやかされる時代、その頂点に立っているのが現代である。そこからどう抜け出すか——それは単に現代の農業の課題というにとどまらず、ひろく現代文明のゆがみ=科学主義と経済合理主義の束縛からの解放の課題とも重なっている。

本全集の刊行に際して掲げた右のことばは、完結にさいしていま改めて我々の課題であります。

本全集に収録できた著書は六十五点にのぼります。分野は稲作、畑作から野菜、果樹、特用作物はもちろん、農具・耕地整理、暗渠排水、養蚕・養蜂・養魚、家畜、病虫害、林業・林産にいたるほとんどすべてにわたっております。

収録させていただいた本は明治の文明開化の中でものされた万巻の著書の中から精選されたものばかりです。日本農業の〈祖型〉としての明治農法をこのような形で我々日本人の共有の財産とすることができたいま、その技術と思想を読みとり、伝え、新たに構想することこそ、先人の遺志にこたえる道でありましょう。日本農業の新たな構築が望まれる今日、農業関係者はもちろん、日本の農業と文化について関心をよせるすべての人々に読みつがれることを願ってやみません。

今回の配本をもちまして本全集全十三巻は完結いたします。第一回配本以来二年余、かわらぬご支援をいただきました読者の皆様に厚く御礼申し上げます。

原著者の技術と思想を正確に伝えるために翻刻・注記・解題の労をとっていただきました執筆者、編集委員、監修委員の先生方には多大なご苦勞をおかけいたしました。心から御礼申し上げます。発刊のつど喜んで下さり、その完結を望んでおられた監修委員の川田信一郎先生は刊行なかばにして逝去されました。心からご冥福をお祈りいたします。

(昭和61年1月)